

---

# 初詣は博麗神社で！ 『後編』

夜斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

初詣は博麗神社で！ 『後編』

### 【Nコード】

N2300BA

### 【作者名】

夜斗

### 【あらすじ】

あけましておめでとう、的なお話（後編）です。

オレの書くオリキャラばかり出演しますので、オリキャラ苦手って言う人はお気を付けください。

逆に、オレのオリキャラ知ってるよって人は楽しんでいただければ幸いです。

舞台は戻って再び博麗神社。

霊夢は来るべき初詣のために桜と用意した大量の特製御神籤を抱えながら境内を駆け回っていた。

「御神籤の箱、何処にしまっちゃったのかしら？　裏の蔵？　それとも社の中だっけ？　ううん……」

「霊夢、境内の掃除はだいたい終わったよ」

「ええありがと。あとは御神籤とお汁粉の屋台と……あ、この御神籤持つて行って頂戴」

「うん。……だけど、巫女さんって意外と重労働だなあ」

車椅子を駆使してあっちこっちに走り回りながら、それでも桜は内心楽しみながら初詣の準備に勤しんでいた。

それにしても、霊夢の特製御神籤のアイディアには桜も力ホリも心底驚かされた。流石博麗の巫女というべきなのだろうか。

『お客さんの反応が楽しみだね』

「うん。私も今から御神籤売るのが楽しみになっちゃった」

御神籤を売るための即興の売り場に特製の破魔矢を並べながら、桜は笑った。

動けない足に絶望していた過去が懐かしい。

昔では考えられないほどに、笑えているような気がした。

これも幻想郷という世界に出会えたこと、霊夢と出逢えたおかげだ。

「あら、私には感謝してくれないのね？」

「うわッ、ゆ、紫さん!？」

何時の間にか、桜の背後に日傘を片手に優雅に立つ少女の姿があった。

紫紺のローブに腰まで伸びた艶やかな金の髪、少女というには少し艶めかし過ぎるような気もする。

「そもそも私が貴女たちをこっちに招いたのだから、私にだって感謝してもいいんじゃないくて？」

「も、もちろんです。えと、ありがとうございます、紫さん！」

「……うっふふ。なあんて、冗談よ冗談」

真面目に頭を下げた桜が可笑しくて、八雲紫はくすくすと微笑を漏らした。

と、紫は桜が手にしていた御神籤に興味を示し指をさして訊ねる。

「それ何かしら？ 普通の御神籤とちよつと違うみたいだけど」

「ああ、これですか？ これは私が作った特製の御神籤なんです」

『私も一緒に作ったよ!』

「あ、うん。カホリちゃんと私とで作った御神籤だね」

「貴女たちがこれを？ ふふ、なるほどね」

小さく折り畳まれた御神籤を見つめながら紫が再び微笑んだ。

「もしかして、紫さんも初詣ですか？」

「いいえ。暇だったから霊夢や貴女を冷やかしに来ただけよ。お正月となると私も暇になっちゃってね」

「はあ……」

「あ、そうそう。もう少ししたら里の人たちがこっちに来るみたいよ。あまり準備が進んでないみたいだけど大丈夫？」

「え？ もう来るんですか？ わわ、じゃあ急いで準備しないと」  
「ふふ。頑張つてね」

売り場に御神籤を置いてくるりとUターンし、桜は霊夢の元へと走り出す。

御神籤の箱がないと売れないし、まだ賽銭箱も準備していないしお汁粉も仕込みがまだ終わっていない。

ぱたぱたと車椅子で駆け出す後ろ姿を横目で見送ると、紫はこっそり抜き取った御神籤を開いた。

「……むう、納得いかないから後でもう一度引き直しましょうか」

右手を薙いですき間を作ると、紫は破れた御神籤をくしゃくしゃに握りしめながら忽然と姿を消した。

・  
・  
・

それから間もなくして、博麗神社の鳥居をくぐる一人の少女の姿。彼女は真冬だというのに麗らかな日差しから逃げるかのように低く日傘をさしながら、キョロキョロと周囲を見回している。

「うわあ、見事なまでにガラガラじゃん！ これじゃあつという間に初詣終わっちゃうね」

と、突然背後から響いてきた声に少女は慌てて近くの茂みに飛び込みその身を隠した。

「……？ 今誰かいたような気がしたんだけどな」

「どうしたあてな？」

「んにゃ、なんでもないよ。それより早くいこっか」

境内をまっすぐ抜け、お賽銭箱の前まで来るとポケットのある場所に手を伸ばして、今はポケットが無いことを思い出す。

「何やってんだよあてな。今は振袖なんだからポケットはないぞ？」

「あ……ははは。すっかり忘れてたよ。へへ」

ホラ、アテナノサイフだ。

「ありがとう」

今の自分が初詣のためにと急ごしらえで作った振袖姿ということと思い出し、あてなは少し恥ずかしそうに笑う。

ちなみに、横に立つ魔理沙やアリスも同様に振袖姿であり、魔理沙は全体的に黒ベースで、所々に小さく雪の衣装をあしらったクールなデザイン、アリスはローブと同じ濃紺の布地に、こちらも同じく雪の意匠を凝らしてある。

「それにしても見事な振袖よね。私たちのためにありがとう、あてな」

「ちょっと未完成なんだけど……えへへ。喜んでもらえて何よりだよ」

魔理沙が借りてきた材料で出来るのはこれが精一杯だったのだが、二人とも気に入ってくれた様子で内心ホッとしていた。

頭の上のぬいぐるみから財布を受け取り、賽銭を選んで放り投げる。

コンコン、と内側から反響するところを見ると中身はあまり入っていないらしい。

「あ、魔理沙……って、何よそのカッコ？」

社東側から現れた霊夢は魔理沙の姿を見てすぐさま反応した。  
いつも見慣れているローブ姿が急に着物姿になったのだから驚く  
のは無理はない。

魔理沙は自慢するかのようにくるりとその場で回転してみせて、  
ちよんと優雅にしゃがんで見せた。

「どうだ霊夢？ 和服姿のアタシもなかなかのもんだろ？」

「へえ、綺麗な着物ねえ。……だけど、アンタが着ると違和感が凄  
いわ」

「む、失礼なヤツだな」

「というか、アンタたちまで着物なの」

「ええ。せっかくあてなに作ってもらったんですもの。それに私も  
着物ってちよつと興味あつたし」

「ふうん……あてなつてのは、アンタね」

「そうだよ。糸柳あてなつていうんだ！ それとこの子は私の大切  
なお友達」

ヨロシク。

霊夢が自分の頭のぬいぐるみを指差すのを怪訝そうに見つめてい  
ると、ぬいぐるみが独りでにむくりと起き上がりペコリと頭を下げ  
た。

「しゃべるぬいぐるみ……」

「ところで霊夢、ありや何だ？ この神社にあんな小屋あつたか？」

魔理沙が指差したのは、鳥居近くにポツンと建つ小さな売店。

「今年はちよつと特別な御神籤をやらうと思ってね。ついでにお汁  
粉とか破魔矢も作ってみたの」

「……賽銭じゃ足りないからって今度は悪徳商法か。落ちるとこま

で落ちたな霊夢」

「そんなわけないでしょうが。何なら覗いてみなさいよ？ 御神籤は我ながら会心の出来だと思っわ」

「会心の出来の御神籤って言われてもな……」

論より証拠、百聞は一見に如かずか。

魔理沙たちは新たに出来た売店とやらに足を運んでみると、カウンターの向こうで見覚えのある少女の姿を見つけた。

「ん、お前は確か」

「あら、魔理沙さんじゃないですか」

ガラス窓の向こうで微笑むのは、いつかの花見の招待状を届けに来た桜だった。

小さな売店の中でギリギリ車椅子が収まっている。前後左右、ほんの少しでも動けば壁にぶつかってしまいそうだ。

「……もうちつと広く作ってやれよ」

「突然霊夢がこの御神籤を売って言い出したから、こんな粗末なものしか用意できなかったんだって」

「お前も苦労してるねえ。……で、それが噂の御神籤ってヤツか」

魔理沙が示したのは、桜のすぐ傍に置いてあった木製の木箱。

箱には上部に丸く穴が開けられており、その中には折り畳まれた御神籤がぎっしりと詰まっている。

「そう。私お手製の御神籤。一回えつと……料金表どこだっけかな」

真新しい看板をカウンターの前に置き、魔理沙たちは早速御神籤の入った箱に手を伸ばす。



「……………ん？」

箱から手を抜いた瞬間、ふわっと仄かに香りが漂う。

春の日差しに咲く花のような、上品な香水のように優しい香り。

「香り付き御神籤……………ってわけか」

「そうです。私とカホリちゃんとで作った特製御神籤。霊夢が『その能力をもっと人の役に立ててみない？』って言うてくれて。それで私たちの『香りを操る能力』を使って御神籤を作ってみたんです」

「人の役に……………ねえ？」

桜の能力を利用して神社の収入を伸ばそうという魂胆が見え見えなのだが、当の桜は気づきもしていないし、それどころか純粹に誰かの役に立てていることを喜んでいる姿を見て魔理沙は言葉を止める。

さて、肝心の御神籤はというと。

「……………お、無難に“吉”だぜ」

「私は……………“小吉”ね」

「ボクは“中吉”だ。なにになに……………『願望：見つかる』だつてさ。願いも何も、ボクの探し物つてもう見つかつてるけどなあ」

頭の上のぬいぐるみをもふもふしながら御神籤の内容を読み進めるあてな。

「アタシは……………『失物：知人の家を探せ』か。そっぴや、またパチユリーに本を盗まれてたっけな」

「それは盗まれたのではなくて、本来の持ち主の元へ戻っただけじゃないの」

「いいや、あの錬金術の本はアタシのだったぜ。パチュリーって名前の上に、アタシの名前で上書きしたからな」

「……少しは悪びれたらどうなの」

ハッハッハと笑う魔理沙をさておき、アリスもあてな同様に自分の御神籤に目を通す。

「『事業：平穩、現状維持を』か。事業って、私の場合里で開いている人形劇のことでもいいのかしら？ 御神籤に従うのなら、例年通りお祭りの時に劇を披露すれば大丈夫そうね」

「アリス、その時はボクたちも呼んでね。ボクもこの子も人形劇には興味あるんだからさ！」

「ええ、もちろんよ。……あら？」

アリスが何かに気づき視線を鳥居の方へと向ける。

その先に、背の高い青年が二人の少女を引き連れ歩いてくるのが見えた。

一人は、桃色の髪にふんわりとした、これまた桃色の着物姿の優雅な少女。そしてもう一人は空色の着物に、帯と腰に刀を帯刀している銀髪の少女。

魔理沙もアリスも、両名とも見覚えがあった。冥界の白玉楼という屋敷で過ごしている者たちだ。だが、青年の方は見当がつかなかった。

蒼と白の道着にやや大振りの太刀をさし、しかしその顔立ちは柔和で誠実そうな印象が見受けられた。

「妖夢と幽々子じゃねえか。こんなとこまで遙々初詣ってわけか」  
「でも、あの人は誰なのかしら……？」

そんな二人の視線に気づいたのか、幽々子は売店小屋の傍に立つ

魔理沙たちの方に手を振った。

「あらあら、新年明けましておめでとう」

「おう、あけおめだぜ」

「何時もながら、ここは空いていいわよね。おかげでお賽銭入れるのも簡単だし」

「霊夢が聞いたら怒るぞ、ソレ」

「じゃ、ちよっとお賽銭入れてこようかしら。ほら、妖夢に千花さんも」

千花と呼ばれた青年は律儀にも魔理沙たちに軽く会釈をしてから賽銭箱を目指す幽々子の後を追っていく。

見慣れない青年に首を傾げていた魔理沙だが、新しい使用人か何かだろうと勝手に決めてそれ以上考えないことにした。興味が無いというのが正しい。

「それで、みんな御神籤は引いたの？」

「おう。後は木に括りつけて終わりだぜ」

「じゃあ、私たちも御神籤買いましょうか。ほら、妖夢お金お金」  
「ありがとうございまゝす」

桜から御神籤の入った箱を受け取り各々一枚ずつ引いていく。

「あら“中吉”だわ。えっと『待人：すぐ傍に』ですって。へえ、一体誰のことかし」

「幽々子様！ 私“大吉”です！」

「あら、あつさり追い越されちゃったわね。それで、何て書いてあるの？」

「はい。えと、『待人：すぐ傍に』……アレ？ 幽々子様と同じです」

「へえ、珍しいこともあるんだな。で、お前は？」

魔理沙に促されるようにして自分の御神籤を開く千花。  
開いた途端、何とも言えない表情が浮かぶ。

「……………“末吉”ですね」

「こりやまた中途半端な。で、何て書いてあるんだよ」

「えっと『交際：女難の相あり』『方角：正面』っていうのは……………」

千花の正面に立つのは妖夢と幽々子。

二人して、神妙な面持ちで千花を見つめている。

「……………えっと」

「千花さん！ あ、一緒に御神籤結びに行きましょう！ 御神籤は結ばないと効果が出ないですよ！ だから早く！」

「わ、わかったよ。だから引っ張らなくても……………！？」

往く手を阻む、というよりかはその往く手を掴むのは幽々子の手。  
がっちり固定されてしまったのかと思うほどにビクともせず、  
その先に静かに笑う幽々子の貌。

「千花さん、先にお汁粉でも食べて行きましょうよ。御神籤結ぶのはお汁粉食べてからでも遅くはないでしょう？」

「え？ ええ、まあ……………うわッ！」

ガクン、と強い力で引き寄せられ体が左に傾く。

右手を幽々子に、左腕を妖夢に掴まれる形で往生する千花の姿を見て、魔理沙は大体の察しがついた。

「ははあ、なるほどね。何時の間にもやたら愉快なことになってるじゃ

ないか」

「気持ちはわからないでもないけど」

「は？　どういう意味だアリス？」

「別に、何でもないわよ」

「……？」

綱引きならぬ千花引きを始めた二人はさておいて。魔理沙たちは自分の御神籤を結びつけに歩き出した。

そのほんの数分後に、再び鳥居をくぐる少女たちが現れる。

「うわあ、何か久々な感じ！　前に一度フランと来たんだよね」

「そうだねヒカリちゃん！　……とと」

鮮やかなオレンジ色の振袖に、背で揺れる七色の翼。

しかし慣れない振袖の所為かその足取りはちょこちょこと覚束ず、時折躓きそうになったりしている。

「二人ともはしゃぎ過ぎよ。新年早々転んだりでもしたら恥ずかしいわよ」

二人の後ろからフランの姉、レミリアが近づく。

薄紅色の着物姿はほんの少し大人っぽいのだが、フラン同様着物は着慣れていないので足取りがやや危なっかしい。

「そういうお嬢様も楽しそうではないですか」

「そ、そんなことないわよ。とりあえず御神籤を引いてそれから……きゃッ」

慣れない履物の所為か足がもつれ、レミリアの体がゆっくりと傾いていく。

普段着なら受け身もとれるしそもそも転ぶことなどないのだが、着物は想像以上に身動きを制限させられてしまう。

ゆっくりと、緩慢なスローモーションの世界。

ヒカリはその世界に、すぐさま現れた銀髪のメイド姿の少女を見つめる。

「お嬢様、大丈夫ですか」

レミリアが地べたに転ぶ、それよりも先に咲夜はその小さな体を受け止めニコリと微笑む。

さりげなく崩れた着物を直すその様は、流石は紅魔館のメイドとあったところか。

「え、ええ。ありがとう咲夜。こつ、着物って見てくれはいいけど動きにくいのがナンセンスなのよ」

「そう滅多に着るものではないですから致し方ありませんよ」

「むう……」

気を取り直し、レミリアたちは桜の売店の方へと歩いていく。代金を払い御神籤を引くと、順番に一人ずつ開けていった。

「……私は“吉”ね。何の面白みもない地味な結果ねえ」

「いいではないですかお嬢様。平穩無事が一番です」

「で、そういう咲夜は？」

「私は……残念ながら“小吉”でした」

「フラン、ヒカリ。貴女たちは……」

「お汁粉つまーい！ 巫女さん、もつと大盛りでください！」

「ヒカリちゃん食べ過ぎー！ 私も食べたいのに！」

御神籤そっちのけでお汁粉に飛び付く風情も何もないヒカリの姿

を見てレミリアは小さくため息をつく。

「……うわあ  
“凶”  
だって。  
『病氣・悪化』  
とか失礼なことまで書  
いてあるし」

「下から数えて三番目ってどこかしら？」

「フランお嬢様、御神籤は最初の一度しか意味を成しませんよ?」

「ええええええええええ！？」

「あの、お汁粉なくなっちゃったってどういうコトですかッ!？」

ぽになっちやって」

そのままずると落ちていき、やがて地面にぺたりとしゃがみ込むヒカリ。

「……さ、咲夜さん！」

起き上がったヒカリの鬼気迫るような視線に射すくめられ、蛇に睨まれた蛙のように咲夜の動きがピタリと止まる。引きつった笑みを浮かべるので精一杯だった。

「帰ったら、お汁粉作ってください！ 砂糖とか黒砂糖とかグラニュー糖とか、ありったけで！」

「想像しただけで気持ち悪いわよそんなお汁粉……」

「は、ははは……」

桜にまで苦笑いを浮かべられ、ヒカリは肩を怒らせながら御神籤を結ぶ木の方へと向かってずんずんと歩き出した。

『……すごい女の子だね。超が三つくつつくくらいの甘党だよの子』

「糖尿病とか虫歯とか大変そう……」

『桜ちゃん、お汁粉どうする？ また作る？』

「追加しなきゃかなあ……まだお客さん来るかもしれないし」

『……む』

カホリの声が不意に止まり、桜が怪訝そうな表情を作る。

「あれ？ どうかしたの？」

『……なんか、私と同じような気配を感じたの』

「カホリちゃんと……？」

鳥居の方へとカホリが視線を向ける。

すると少女を挟んで此方に向かう男の子の姿が見えてきた。

「ほら水織、早く行かないと御神籤無くなっちゃうよ！」

「石段の上から引張るなよ穰子」



「水織君を急かしても意味ないでしょう穰子。御神籤は逃げないんだからゆつくり行けばいいの」

きやつきやつとはしゃぐ少女と男の子を見て、桜の銀の瞳が小さく光る。

男の子を挟んでいるあの子たちは、カホリと同じ神様だ。直感とつか感性とでもいうのか、カホリの中の何かがそう告げている。<sup>センス</sup>その視線を受けたからなのか、同じ感覚を持ち合わせているからなのか、不意に彼女たちも此方に振り向いた。

「明けておめでとうございます、博麗神社にようこそ」  
「う、うっす！ えと、あけおめです」

思ったよりも綺麗な巫女を前に、水織がやや上ずった声で桜に答え頭を下げる。

体格よりも幾分大きめのジャンパーに精悍な黒い瞳。

ジャンパーという、この世界では見れない恰好を見て桜は彼が自分と同じ外の世界から来た人間だと予想した。

「私、天春桜って言います。あなたのお名前は？」  
「草津水織です。それでこっちが」

水織が後ろの二人を紹介しようとして、しかし桜の手がそれを制した。

「ああ、名乗らなくても大丈夫だよ。だいたい察しはついてるし、わかるから」

「は？ わかるって……」  
「……お姉ちゃん」

穰子の目配せに静葉も頷く。

「ええ。私たちと近しい人みたいですね」

「は？ 近いって……？」

銀と黒の瞳は水織ではなく左右に立つ静葉と穰子とを交互に見つめる。

桜の様子が打って変わり、無邪気な子供のように碎けた口調に変わった。

「えっと、初めまして。私は天春力ホリ。よろしくね」

「初めまして。私は秋静葉。紅葉を司っているの。そしてこっちが妹の」

「秋穰子。豊穰を司っているわ。よろしく、新入りの神様」

「あはは、こちらこそよろしく」

「……？ な、何を言ってるんだお前ら？ この人は桜さんだって名乗って……」

ちらと横目で桜を見たが、ニコツと無邪気な微笑みで返ってきた。先刻見た大人しそうな様子が微塵も感じられない。名乗った名前も変わってるし、それこそまるで別人のようだった。

「博麗神社には神様がいないっていったけど、もしかして此処の神様なの？」

「ううん、違うよ。香りを司る神様だけど、私は桜の家族で友達」

「何だか変わった神様だね。……まあ、今の私たちも神様にしては珍しいことしてるけどね」

「珍しいこと……？」

銀と黒の瞳が興味津津といった様子で首を傾ぐ。

「私たち、今里で銭湯やってるんだ」

「せん……とう？」

『お金を払って入るお風呂のことだよ、カホリちゃん』

「へえ。面白そうなことしてるんだね。私たちも今度行こうか？」

『うん、そうだね』

「……？ あの、一体誰と会話してるんですか？」

「あ、そろそろややこしいから交代しようか」

右目を片手で覆い小さく息を吸うと、淡い光に伴って桜が目を開く。

「……ふう。ごめんね水織君。ちょっと混乱させちゃったかな」

「え、ええっと……？」

それだけなのに、彼女の雰囲気は百八十度がらっと変わり最初に水織が見た時に戻っていた。

「じゃあ、こつちもお仕事しなきゃ。御神籤に破魔矢、如何ですか？ お汁粉はさっき売り切れちゃったんだけど……」

「あの、桜さんって一体……」

「ほら、それは後で私が説明してあげるから！ 御神籤引こうよ」

「お、おう……」

「ということで、御神籤三つくださいな」

「ふふ。では、ここからお引きくださいな」

小さな箱の奥に手を突っ込み、それぞれ自分の御神籤を開いていく。

「……お姉ちゃん、何だった？」

「穰子こそ、どうだったの？」

「じゃあ、同時に言おうよ」

「いいよ。じゃ、せーの……」

「“大吉”！」 “大吉”！」

二人して顔を見合わせ、ふふつと小さく笑みをこぼす。

「あっはは。姉妹だからって、同じ結果出さなくてもいいのに」

「でも、他のことは違うでしょう？ ほら、私は『金運：人助けありってかいてあるし』」

「私の方は『事業：良くなる』って書いてある。銭湯経営は順調かもしれないね」

『で、待ち人は……』

見事に声が重なり、同タイミングで互いの御神籤に視線を向ける。二人の御神籤には『待人：待て』と書かれていた。すかさず姉妹は水織の方に視線を向ける。

「ううん “末吉” ねえ。今年はあんまよろしくないかも……ん？ どうしたお前ら」

「……待て、だよお姉ちゃん？」

「穰子も待て、でしょう？ だけど……」

静葉は水織の腕を掴むと、悪戯っぽい笑みを浮かべその腕を強く引き寄せた。

「うわ！ 何だ何だ？」

「ほら、御神籤は結ばないと意味がないでしょ？ 早く結びに行こうよ」

「ず、ずるいよお姉ちゃん！」

「な、何だかわからんが結びに行くのか？　おい、穰子は掴むところがおかしい！　関節入ってるだろうぎやああああッ！？」

「青春してるなあ……あの子。羨ましい」

三人を見送ると、御神籤売りの仕事に戻る。

彼らが来た後、里の人たちが少しずつ初詣に来てくれたので途端に桜は大忙し。

御神籤も破魔矢も飛ぶように売れて、破魔矢は一本残らず、御神籤の箱はほとんど空っぽになってしまった。

冬の日暮れは早く、六時を過ぎた辺りで博麗神社周辺は一気に夜闇に包まれてしまった。

「お疲れ様、桜」

「あ、霊夢。そっちこそお疲れ様」

売店の小屋に霊夢が現れ桜に労いの言葉をかける。

一日中座りっぱなしの所為もあって腰が痛い、何て言ったら笑われそうな気がして桜は口の中でその言葉を呑みこむ。

「ずっとここにいて寒かったですよね？　紫からお餅とかいろいろ貰ったから、今日はお雑煮にでもしましょうか」

「ホント？　うわぁ、霊夢のお雑煮楽しみだなぁ」

「変に期待しないで頂戴よ。じゃ、私は少しやることが残ってるから桜は先に戻ってていいわよ」

「うん、わかった」

御神籤の箱をひっくり返すと、御神籤がちょうど一枚だけ残っていた。箱の隅にでも引っ掛かっていたのだろうか。

「ふふ、残り物には何とやら。せっかくだし、これを私たちの御神

籤に」

『……そこ、誰がいる』

「え？」

カホリの声が響き何事かと視線を巡らすと、確かにカホリの言うとおり鳥居の傍に小さな人影が見て取れた。

影は比較的大きく、人と、それに何かが覆いかぶさったような形をしている。

桜が目を凝らしてみるとそれが傘を差した少女だと気づき、同時に彼女が誰なのかすぐにわかった。

「あれ？ 幽香さん？」

影は、日傘をさした幽香その人だった。

何故こんな時間に鳥居の傍にいたのか、そして何故姿を見せなかったのは謎だったが、桜は小屋から出て幽香の方へと車椅子を押していく。

暗がりの所為でハッキリとした表情は見えないが、ほんのりと顔が赤く染まっているように見える。

「明けましておめでとうございます、幽香さん」

「え、ええ。明けましておめでとう」

「でも、どうしてこんな時間に？ もっと早くに来れば賑わって楽しかったのに」

「それはえと……」

「……？」

もじもじしてる理由がさっぱりわからず首を傾ぐ桜。

『……この人、随分前から此処にいたみたいだね』

「え……前からいたんですか？」

「その……一度貴女を傷つけた手前、すんなりと姿を現すのもどうかと思って」

「そんなこと別に気にしなくてもいいのに。あ、そうだ。よかったら一緒にお雑煮食べませんか？ もう少ししたら霊夢も帰ってくるし」

「い、いいわよ。もう帰るから」

「でも……あ、そうだ」

残り物だけど、と付け加えながら桜は御神籤を一枚取り出し幽香に差しだす。

「……それは？」

「最後の御神籤です。どうせなら幽香さんにプレゼントします。私からのお年玉、って感じで」

『いいの？ それ売り物じゃん』

「ちよつとぐらいいいって。はい、幽香さん」

ずい、と差し出された御神籤に面食らいつつも、幽香は自分でも不思議なくらい素直な挙動で御神籤を受け取った。

しかし、受け取る時に無反応だったせいか桜が気まずそうな視線を送ってきている。

「や、やっぱし残り物じゃ嬉しくない……かな」

幽香は小さくかぶりをふると、御神籤を慎重に開いていった。

「……………ふふ」

微かに笑みをこぼし、幽香は顔を上げた。

「これ、本当に頂いてもいいのね？」

「は、はい。……あ、だけど御神籤は木に結ばないと意味が」

「そうなの？　じゃあその木まで案内してもらおうかしら」

「え……？　それって」

「私、この場所はよく知らないもの。案内していただけるかしら？　小さな巫女さん」

「は……はい！　こっちです！」

桜は頷くと幽香の手を引き、参拝客が結びつけていった木の根元へと引つ張っていく。

木に結び付けられた白い御神籤が、まるで花のように広がっている。

その白い花のすき間を見つけると、幽香は御神籤を小さく畳んで結びつける。

「……これで、御神籤の効果が出るのね？」

「はい。あの、幽香さんの御神籤はどうだったんですか？」

「私の御神籤？　えっと……」

と、思い出すフリをしてクスリと微笑む。

自分の答えを待つ桜に、幽香はこう答えた。

「……秘密、ね」

「へ……？」

呆ける桜を見、幽香はもう一度小さく笑った。



## （後書き）

お正月短編、後編終了です。

微妙な才チだなあとちょこつと反省中。

なお、此方の作品のあとがきはしばらくしたら活動報告の方で書きます。

あけましておめでとうございます。

そして、読者の皆様も、体調等お気をつけて！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2300ba/>

---

初詣は博麗神社で！ 『後編』

2012年1月5日21時46分発行